

913.5

ソ

初

烈

園

西

卷

満壽
所藏

園の花物挿し序
心算友家へ申す
女は桐子の意を深き歌に
こゝに僕も風雅なる金糸字書
家愚俗の志討借儀乞ふ
身隠一日友家へ書す



Handwritten notes and signatures in cursive script, including a signature that appears to be '満壽' (Manshu) and other illegible characters.

の小亭に食客とるりまきり其意中
 旬を過つて澤山満る春水と夏日奇
 峯城跡えつていさうとて思を消殺せ
 りと春の日記を戯作の合也此の彩
 葉子に花したる意の白玉とまりのあふれ
 連玉堂のたけえられ小冊とてあふれ

補綴くく外黙を憲けたつて半支の
 意よ候そえて束るまぬ色くを
 勝の標はまお園がうらうら花をさうり
 久しと自列の美談をまらけくま
 あぐよしてめでか記まふ泳とせん
 應して筆を操れとて稿を肯とせり

ばきつ功拙こうせつもに平ひら心こころ子こ任まかを次つぎ々々教まけ糸
 雜まじ成りはぬまいたるを補おぎなひ見みぬ音ね重おもき連
 のこゝろ散ち子こ備そまふ新あたら奇きといふまいたる様さまもま
 折お下ひ也やと紅あか老いのこゝろ花はなと海うみのなみつらるなみ庭あやお
 の様さま言こと我われをわげららぬも重おもくは武ぶ家け林りん倍ばい
 泉いづみの築つきの山やま堅かたく日ひ景けい色しきを幕まくあまわて

次つぎ茅かや小こやらららぐ四し季きは夜よ春ある夏ん秋あきを
 嫌きらひあらぐ賞あほう教うあらんとをねがひあらん

于時天保乙巳中夏稿成

金龍山人狂訓亭

爲永春水誌



三世の奇縁

二世のやくそく

百折の言ひもかたじけなく
千磨の憂甚くして
松の櫛も知らずんば

笠松家の...



猶も覚なき人夢の中
蝶々て世同様の夢
如の



半七の男の家
七喜男の家
松



在^ま五^ご中^{ちゆう}將^{しやう}の
 豊^{とよ}大^{だい}夫^{ふう}の
 尊^{そん}卿^{けい}と
 君^{きみ}の^み



半^{はん}七^{しち}他^た家^けの^の繼^{ついで}を
 於^お園^のと^と同^{どう}宛^{えん}の
 契^{せき}の^の結^{むす}を
 兼^{かね}楚^そ少^{せう}も
 吳^ご小^{せう}松^{しょう}氏^し
 德^{とく}と^と合^あは^はれ^れる
 美^み婦^ふの
 富^{とみ}と^と又^{また}
 孝^{かう}子^しと^と亦^{また}か
 光^{ひかり}中^{ちゆう}將^{しやう}の^の美^み男^{おとこ}

蝶乃

良

身ノ

子ヤ

花ノ記



貞烈美談園の花初編一の巻

東京 狂訓亭主人補綴

第一章

武士の賞^{あづか}賜^{たま}ふ^{たま}ふ^{たま}けり。と^と子^こ孫^{そん}が^が文^{ぶん}武^ぶの^の吟^{ぎん}
 今^{いま}の^の世^よの^の世^よを^をあ^あり^りけん^{けん}鎌^{かま}倉^{くら}佐^さ々^さ谷^やの^の屋^や補^ほ
 と^と湯^ゆり^り食^{じき}禄^{ろく}二^に千^{せん}石^{しやく}を^を願^{ねん}と^と豊^ゆ谷^{たに}半^{はん}を^を得^{とく}ひ^ひ
 者^{もの}あ^あり^りけり^{けり}竹^{たけ}室^{むろ}六^む仲^{ちゆう}と^と鳴^{なる}き^きの^の鳴^{なる}る^る
 ひと^{ひと}算^{さん}と^とあ^あ娘^{むすめ}を^をめ^めあ^あり^りせ^せ家^{いへ}の^の心^{こころ}も^も

治ありて上下和順ありけるは、治ありて 此の半をまゝ半
歳の節、歳 内室お仲、内室お仲 姓身一とあり、姓身一とあり 此の半
をまゝ酒死ありけり、酒死ありけり 算年者、算年者 家督を継
半をまゝ亡後、亡後 お仲の男子、お仲の男子 出生、出生 何れも、何れも 名を半
と名づけお仲の祐、お仲の祐 嫁とあり、嫁とあり 法名を真心と
改め、改め 佛の道、佛の道 お志を、お志を 添く、添く 欲し、欲し 子供の成人を
祈る、祈る しかく、しかく 月、月 矢、矢 とも、とも 早く、早く 半を、半を 清く、清く
よの中、よの中 お女の子、お女の子 と、と 継、継 け、け 家内、家内 の、の 養、養 育、育 の、の 成、成 り、り

あり、あり 半七、半七 たる、たる 七、七 の、の 藝、藝 心、心 七、七 の、の 解、解 盤、盤 の、の 九、九
類、類 人、人 業、業 半、半 と、と 爲、爲 せ、せ 九、九 後、後 室、室 真、真 心、心 の、の 悦、悦 び、び 心、心 かん、かん
なく、なく 樂、樂 し、し 三、三 百、百 と、と 言、言 へ、へ け、け ら、ら 本、本 時、時 用、用 人、人 十、十 年、年 貞、貞 公、公
の、の 社、社 屋、屋 機、機 操、操 を、を 傾、傾 四、四 方、方 の、の 咄、咄 の、の 法、法 心、心 伝、伝
傳、傳 の、の 守、守 たる、たる 半七、半七 の、の 七、七 と、と 云、云 半、半 一、一 百、百 自、自 慢、慢 の、の 志、志 義、義
を、を 十、十 五、五 半七、半七 たる、たる も、も 能、能 殿、殿 たる、たる お、お 成、成 なる、なる 事、事
たる、たる 事、事 を、を 早く、早く 空、空 所、所 へ、へ 御、御 事、事 子、子 比、比 多、多 爲、爲 人、人 扱、扱 せ、せ
した、した 事、事 の、の 事、事 也、也 十二、十二 年、年 早、早 ら、ら 六、六 十、十 三、三 年、年 海、海

ての工と廿 ^十 一 ^先 先殿 ^{さむ} さまの ^{こひ} ね ^{せん} 送 ^ま とも ^ご ござりま
ま ^あ 除 ^り お ^う 業 ^が 加 ^さ ありと ^か 心 ^を せ ^ひ の ^ゆ 来 ^ま せ
その ^あ 何 ^の 方 ^の 流 ^母 堂 ^も 急 ^角 の ^ひ ま ^で も ^お 側 ^へ
お ^あ 置 ^る 工 ^り の ^ご づ ^の 一 ^同 で ^随 分 ^の 最 ^で ござ
ます ^が ね ^ん 分 ^ど か ^と め ^る 一 ^わ 一 ^も 早 ^い の ^が 工 ^一 づ
ご ^ご の ^ま せ ^一 私 ^も 在 ^後 の ^思 へ ^け れ ^と 養 ^父 の ^ま せ
ん ^も ぞ ^り 秘 ^か ず ^一 第 ^一 潜 ^執 事 ^も お ^不 つ ^る 工 ^放
マ ^ア 何 ^う ぞ ^よ く ^覺 さ ^せ 工 ^う 人 ^で 一 ^十 一 ^工 工 ^を 工 ^ら 工 ^ら 工

モ ^お 素 ^は 工 ^ひ 工 ^さ れ ^ま せ ^る 生 ^海 の ^ゆ 登 ^り 工 ^秘
工 ^ご 工 ^や 中 ^へ 工 ^ま 工 ^せ 取 ^が 只 ^お 業 ^ト 中 ^の 除 ^り
男 ^が 工 ^と 工 ^か 工 ^わ 工 ^ら 工 ^る 工 ^る 工 ^る 女 ^の 惚 ^る の ^が 始 ^終
お ^身 の ^邪 工 ^に 工 ^も 工 ^な 工 ^ば 工 ^よ 工 ^い と ^存 工 ^ま 工 ^せ
ト ^は 工 ^の 折 ^る 工 ^腰 工 ^三 勝 ^一 工 ^入 工 ^陽 工 ^を
せ ^せ 工 ^の 自 ^志 工 ^と 工 ^後 工 ^室 工 ^ハ 工 ^る 工 ^が 工 ^て 工 ^究 工 ^未 工 ^大
を ^合 工 ^一 親 ^子 工 ^と 工 ^い 工 ^て 工 ^の 工 ^ご 工 ^ま 工 ^せ 工 ^が 工 ^十 工 ^車 工 ^に
その ^後 工 ^し 工 ^や 自 ^志 工 ^母 工 ^お 工 ^似 工 ^る 工 ^容 工 ^儀 工 ^が 工 ^よ 工 ^し 工 ^ト 工 ^男

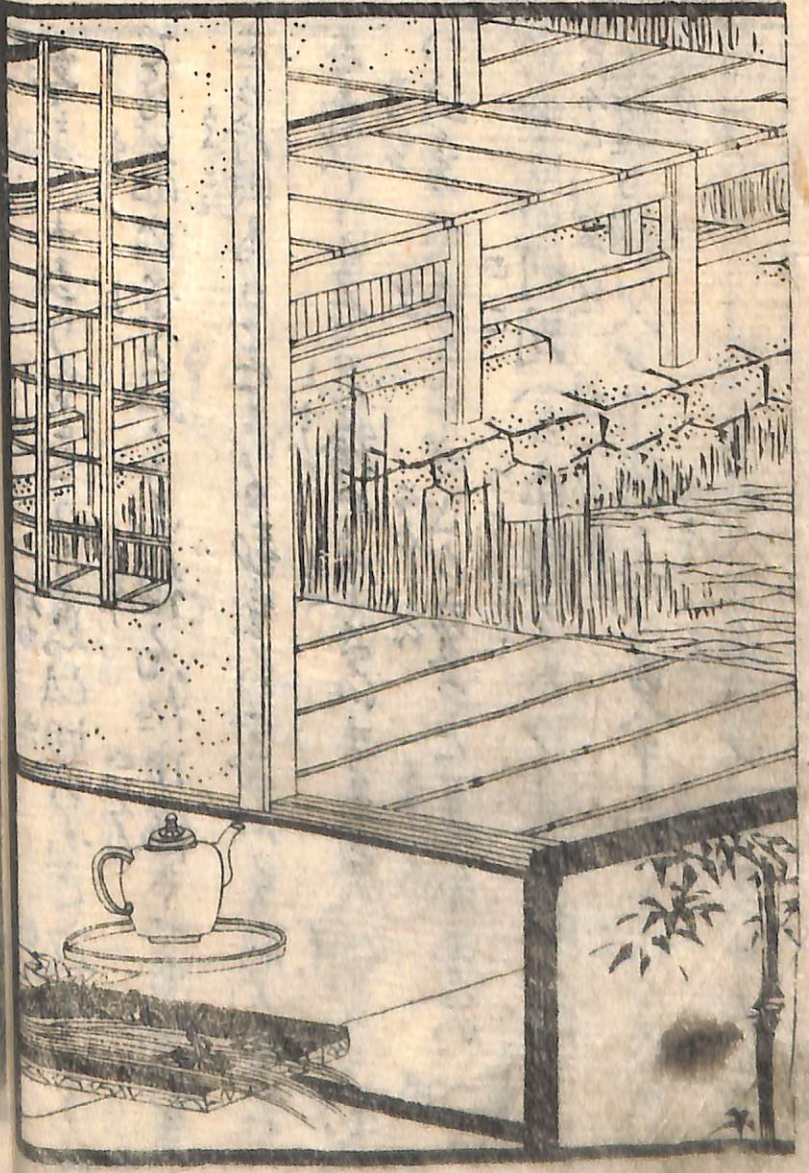
きそハツと三勝が顔に紅葉あけ夕映やうき
とまをゆくさう伏向親いらまうき男のをほ
十イエモウ形むくり成人ありあてりけぬ
せんぞのをよりあう水教訓を預ひまは
鴻田の女子でい極ふまはけら穢るごごふ
むをわうよん響をこころして十年よ安堵さ
せたぬ。ドレちよろと陽に入ませうイヤ十平
をへて居るよト立上る 十イ有がうふ存ト

また私も旦那さ由のゆきけんを伺ひませうト
同トく初巻と立上る係を残りて三勝の後室の
着習の小袖と巨燧（掛其辺を片寄居所）
半七八杜若をむにりうて庭よりより（母人
さん）イイ只今お陽へお入すさううう
志の苑でござのまは子（これハ其方の誰名と
何でござんす）杜若といふことヨ（中身
の工もござのまはる）其方の半は舟の板と

ふふ
まことサアしまゝあるがりのあそびをまきまきする
葉み糸のやうにほろ入るまきヨ
あつきのそらふ己
あのおねを悪人にするのヨ
アサお顔のこら
アこのでござんすまらヨ
イヤく悪業のことごと
お違ひらるゝ其代りお斯くせやるトむつくりと
あ際たぐひお白を見え完ふと笑ひ
おあはさまき提さと合點してませんヨ。とら
ゆるがうお家来の身分で勿辨るゝと明

これ
善きまよるりのまきまき思ひ切らふと存トす
てもおのの世とやうお結んだお縁々でもござんす
まう片時もまきまらるゝおまのいござんすせんぞお
まをぐまてん提てりよおまをまきまへ
いけ方てまことご心がなると兼知あるの
あるこハ何物ハの由難子おいらあやる由配分
先程も親父が由縁おはさあ中よとて飛ぶの如
まきまき

貞婦 孝子 節婦 生



あやに

世ありせ

そと

あつて

ついで

とて

おま

あり

た

は

か

こ

に

は

な

り

を

さ

ま

り

あ

ぐ

は

く

そ

れ

を

苦

勞

に

あ

か

を

あやに

世ありせ

そと

あつて

ついで

とて

おま

あり

た

は

か

こ

に

は

な

り

を

さ

ま

り

あ

ぐ

は

く

そ

れ

を

苦

勞

に

あ

か

を

あやに

世ありせ

そと

あつて

ついで

とて

おま

あり

た

は

か

こ

に

は

な

り

を

さ

ま

り

あ

ぐ

は

く

そ

れ

を

苦

勞

に

あ

か

を

中なかつは蜂はちが唇くちばしくちめてさうさうさうそれて笑わらせ
込このどうそと思おもはる浦次うらじのまじりか
まご大方おほくさそのまじりあるたふたふ惚おれられ
かご仕し振びがてまま見み替かる女をんながあるのうト
寄よられて嬉うれしくもなまれがつまま苦くのこら
思おもはるおくを思おもはるべし折や浦次うらじがう次つぎ声こゑ
浦うら七しちさまめくくトつられてびららり二人にをと飛と退ひ
浦うらんど且かつ那なさまめがあらうとなまま入いりと

拜まがしくこウウ三さん勝しょうこのはなを母おれさんお上てなりや
トいちち捨すて奥へ行跡あと浦次うらじと三勝さんしょうの部屋や
内うちと行寄よるがら一三勝さんしょうさんおまま今いまの内髪かみ
どお結むする二私わたしのマア用を上てく結むすひ
まませうヨ一その花の用之私がた振ちりまふ
うう早はやくお結むするそうと今いま日ひの昼ままわわか
密ひそかあるとチスこととうううのそがのヨ一若わかいそ
がく結むするなりとヨ一あまりいちち七しちさまめれい

用と^しつと^し得^る身^をと^りて^は成^すを^れぬ^れ
むら^に通^じ見^えし^とし^に有^るを^もて^は平^に通^じぬ^れ
振^りお^りあ^らむ^をお^もひ^にな^らば^は後^に室^をさ^るの^事
へ^もな^らむ^とさ^るに^ては^はた^に振^りお^もひ^にな^らば^は後^に室^をさ^るの^事
と^お結^ぶる^に私^が成^用の^にま^じり^ては^は平^に通^じぬ^れ
こ^しに^はお^もひ^にな^らば^は後^に室^をさ^るの^事
ら^に振^りお^もひ^にな^らば^は後^に室^をさ^るの^事
た^もも^もな^らば^は後^に室^をさ^るの^事

こ^しに^はお^もひ^にな^らば^は後^に室^をさ^るの^事
へ^もな^らむ^とさ^るに^ては^はた^に振^りお^もひ^にな^らば^は後^に室^をさ^るの^事
ら^に振^りお^もひ^にな^らば^は後^に室^をさ^るの^事
家^の外^に通^じぬ^れ
る^のに^はお^もひ^にな^らば^は後^に室^をさ^るの^事
類^たが^らぬ^れ
帯^をさ^るに^はお^もひ^にな^らば^は後^に室^をさ^るの^事
て^は振^りお^もひ^にな^らば^は後^に室^をさ^るの^事

さ由の仍なほあらあの燕つばき子こ花はなと十三日じゅうさんゆまふらとと
つと進ませられましま後のち一いっ九じゅう拾しゅう九じゅう佛ぶつさらゆら日ひと
りりもも今け日ふののいいははきき易やすいい日ひどどののおお守まもりりと
よよくく氣きののほほととととトト更さらよよととよよ親おや心こころアアリ
半はん七しちおおたた拾しゅうととととりりやや内うち佛ぶつ前まへへへ倚よりりもも餘よ程ほど
残のこりがが出で来きるるおお依よりりてて床とこへへ坐ま生なまをを頼たのままたいいと
母ははががいいふふとと呼よべべたたももノノウウ三さん勝しょうトト云いひひつつくく例れいお
浦うら次つぎががいいつつもものの出で過かハハイイ半はん七しちささ由ゆハハ只ただ今いま

契けいへへははおお入いりりししととおお呼よべべややててあありりおおせせううトトそ
とととととと立たちち行いくく姿すがた貞まこと心こころハハ見み送おくりりととアアノノ浦うら次つぎ
ととああとととと浴ゆ衣いをを干ぬせせとと云いひひつつけけとと云いひひつつくく事こと
ててららああるるそそれれよよ引ひきき習なむむ其その方かたのの志こころざしをを私わたしハハ半はん七しち同どう
程ほどにに思おもつつてて居ゐるるとと何なんぞぞ預ねがひひががああるるとといいふふ必かならずずず
隔くわりりにに思おもつつてて居ゐるるとと何なんぞぞ預ねがひひががああるるとといいふふ必かならずずず
程ほど二に人にんがが其その風かぜ躰たは水みづももののりりとと出でぬぬをを分わ別べつあありり
廿にじゅう五ごののがが若わかむむししんんみみととももああららいいつつととつつとといいふふ

嗚も存祈よせらまそと業と煩ふ親の
悪よき相命と三揚のまどは久
まゝなるおま業滅おお嫉しうぞんじまは思
ハ死でも日なれませぬその由おあまそ
何ありともいふがよふ時てやらうとやらう
ふ情も深き真心のま業は膝をまらぬ
あどわきまをねがひけり

第二章

彼三勝の志もぐと預へば後室心と察して
かしのさうお娘公の一筋ゆゑ今も誓の由ある
扱ふ業といふあつる堪忍しやまど保がらゆる
ハ否で通して居やうもようらふ被令親父が何
とらふてもけ真心が精合不とお多きまま
おのりやるるヨハイ有雅ふ存じまはそのお業
といふまきしと胸のほろろ下まゝとや
志のまきしと胸のほろろ下まゝとや

き
系がつ死ませんト火入を採てまゝにこれより
方々真心の不便とてつけてらるは何れもま
ま秋と三ツウ重ねて今もたや半七の衆十九才
た三人男であればこそ七雅九厄とまあるる酒を
さでかくへ死款と母の安帯ト小随ひて大所河原の
此縁日兼て其日と結けり跡生の空に深ら
小連ハ出入の草沢園中々野乾筒とよなる稻
田安幸光る頭と振立く一サテ若旦那早
とやううませう何不永日でも路が遠い

とやううませう何不永日でも路が遠い
サア〜モモ衆さん衣類とをやく野にさせん
衆三つさゆ人とするこれ
三つが梅我小惚うたるは
さる私ハ梅我さんと六やません
お主人宛あまふ梅衆飲ひがれごらちる似るので
あつた且那のお迷ひるごらちるも無理あるせり
三存トませんヨ
お主人宛あまふ梅衆飲ひがれごらちる似るので
あつた且那のお迷ひるごらちるも無理あるせり

東イ 兄さまおひさま乞ハ提をうましヨ 一葉おく
イヤア三橋さんの用心配をうまし惚ハ性根イヨ
うまのと尸を先お支度より一是より
手首く幕の引返ハ浪の音あてはわき
道具うらて品川の場場主と美少年の
道行とらふと若旦那がお寺の小姓の振ごモ
ちのトちうの字う子 一それららんまさん胸り多
辨たうさうりふ禁句をオホミ 一イヤア大和

屋ア引一まご其指上を 一トキニおま人も十九の厄
とこのあかせう 一このあかせう 一このあかせう
案此和尙が代考でお守と 一トキニおま人も十九の厄
預ひませんいさいて来てをらふと名作おまら
ありまに 一オイまごあくありあひそはくしご子
トこの内半七八奥ハいとまを 一トキニおま人も十九の厄
ハおふ立兼平といふ奴を供を出うけるハ
半七を呼ぶめ何う唄くるうのよさ安幸をま
のどり 一イヤア床をなれでるの出版のりら



事^{コト}モシ^シ今夜^{コノヨ}の品川^{シマカワ}泊^{トモ}で明日^{アス}の日^ヒ輪^{リン}さるが暮^ク
 金色^{キンシキ}羊^{ヒツ}七^{ナナ}さうの愚僧^{グソウ}の扇^{アウ}ふかろうと雲^{クモ}月^{ツキ}が
 ぶらり〜^{さんろく}モシ^シ三勝^{さんしょう}さんようごごのまきる 下^{しも}とよ
 とも思召^{おもひまわ}次第^{しだい}策^{さく}私^{わたくし}の存^{ぞん}下^{しも}ませんそ代^{しろしろ}り由^{よし}後^ご室^{むろ}
 さゆへ告^つますは 安^{やす}イヤアそれの大^{おほ}変^{へん}く若^わ且^{じん}那^な
 が上^{あが}らふとを作^{あつか}てもけ坊^{ぼく}主^{ぬし}が由^{よし}縁^{ゆかり}云^いや上^{あが}と至^{いた}理^り
 小^こ引^ひてくるが和^わ尚^{しょう}の寸^{すん}志^しるんと頼^{たの}母^ぼの方^{かた}丈^{ぢやう}
 さゆへとごさんせんくゝるア 下^{しも}おそのく〜とりひ

ろろりゆ由^{よし}元^{もと}素^{もと}と孫^{まご}エ 安^{やす}イヤア本^{ほん}をうふた後^ごごけ
 品川^{シマカワ}のホイゝるんごッけヲそれく若^わ且^{じん}那^なのモウ
 先^まへか出るよのす〜 安^{やす}イヤアそれの大^{おほ}変^{へん}出^で〜抜^ぬ
 きてる殘^{ざん}念^{ねん}る遠^{とほ}く〜ゆ〜まの跡^{あと}追^おけ〜てマ〜
 若^わ也^やト身^み振^ひてらるる物^{もの}〜め〜お〜ま〜あ〜
 て走^はり行^いか〜て大^{おほ}師^しへ来^きけ〜途^と中^{ちゆう}の酒^{しゆ}飲^の
 いらん〜さ〜く〜あ〜そ〜び〜や〜が〜我^わ家^か〜場^ばり〜
 人^{ひと}づれの路^ち草^{くさ}子^こ芳^{ほう}ま〜と〜ま〜ま〜元^{もと}氣^き〜し〜く〜安^{やす}

ハ門赤也 一私ハ直小見うう お別れひうう

マモウ 若旦那もさうてかておれ 兼平さん

羨ましく明日森上りのううませうトおく半七

引止る 一マアよろら其折小宅へいそぐま

は生海苔でちよっといと口 一ううさゆ是も野

不 考うう取ことごねトさうと死あううて海りけま

待まふけたる家内の娘ひひ三勝ひひもくと

お茶ヨか火とト受け目なく 一衣類も温て

かのもまをかかさるゆか待うね早ふ奥へお出あそ

をせトおをほけて立つ居りいらねと知くま

沢ある中半七ハ三勝の白ひ 一和尙のトトハ

ハハ少くお肴も出来ま 一そんなら安

幸さん一盃やらうりまわると私のお知屋と奥

へゆて来るうう始めさせ 一そのうのあが山搦ト

吉の地ねと御山子さうておわ 一きえおまとの

三勝ハ酒肴をいづ 一今日ハおのりののを

ハ門赤也 一私ハ直小見うう お別れひうう

マモウ 若旦那もさうてかておれ 兼平さん

羨ましく明日森上りのううませうトおく半七

引止る 一マアよろら其折小宅へいそぐま

は生海苔でちよっといと口 一ううさゆ是も野

不 考うう取ことごねトさうと死あううて海りけま

待まふけたる家内の娘ひひ三勝ひひもくと

お茶ヨか火とト受け目なく 一衣類も温て

かのもまをかかさるゆか待うね早ふ奥へお出あそ

をせトおをほけて立つ居りいらねと知くま

沢ある中半七ハ三勝の白ひ 一和尙のトトハ

ハハ少くお肴も出来ま 一そんなら安

幸さん一盃やらうりまわると私のお知屋と奥

へゆて来るうう始めさせ 一そのうのあが山搦ト

吉の地ねと御山子さうておわ 一きえおまとの

三勝ハ酒肴をいづ 一今日ハおのりののを

澤山あがらうらふくはね振るものりけきまをま
サアお酌をいりませう
おと待ませうイヤ晴ふ三勝さん今度高輪の
茶屋でかりーろのとありまーをいんると
かごのいすーと
おぼるせ人
の飲
あれが本舞どと女作まーとイヨ契さあくり

アレまごそんをととをてかまよまを成て六本をど
さへまをト是がそ下めのかろのそをまがく時刻
とろろー半七も来りて酒おとあり徳もあけ
しまう安幸ものともを告て立くる酒ふ二入る
さー向ひ
性で来れがい
いくら半七の方の用とたせとを作ま
も井いも市夜の市後宝さあまを吾のお仕入合で

いまれりや〜の扱あつかでござるもまき由縁よしゆりの扱あつかが
ませそ〜と申まを字あざにいはれ入いり申まをでござるもまき
被よ扱あつかひるんぞ申まをお出いあそびまきりるのお噂うわさでも
あるといふよござるもまき 一一評ひやう判はんが目めく〜と申まを字あざに
り〜ひてござるやアあ判はんりとのござる〜といふこと
編へん入いり〜別べつ宅たくあてまめを女め房ぼうおまきまれば外あ外あ
申まをまきりも申まをあ〜といふのござる何なんと実まこと下したやあるま
歎なげ一一涙なみだおかれあうひさおまき何なん不ふ私わたしがられ

あのと申まをて申まを入いりさるや親おや達たちの心こころを〜水みづの
泡あわふ〜とマア私わたしがそれを宜よろと申まをて居いれまき
と申まをてもお別わかれおまき〜ら死しぬと覺おぼ期き〜と未いま
来きと頼たのむまきるのあ形かたちひお察さつ〜あまらて申まを
申まを〜と無む理りを申まをた〜とまきか〜らたあませ〜所ところ
堪た忍しの悔くげ〜と申まを下した涙なみだおまき〜と申まを〜と申まを
せあて〜をれあり 一一あんのマア今いまの〜と申まを〜ある
申まを〜それを苦く勞らうおまき〜と申まを〜と申まを〜と申まを〜

半信子に由らむのと云へし悪くらふが身りちを
まろくして世真ひ人の秘入やう中まろくしつとや
秘入其秘入漁びとらひるマア酒でものをきそ
てモウみんるが癖と秘入さうたれも来らぬ秘入
可いありがたふ存トまも下涙をぬぐひあき
いた秘思召しても若ねもまろく云ふ身あきりな
されしう内後室さあひどの秘入お秘入あそびまそ
むむいませうとよもた秘入りません私に尼小秘

ままそらう参入君の内出世あそびませへ感心し
てまへおけんゆまと死
か出あるののうト脊をさで他目もあられを對
膳あて食ひも済ま床も延々一た秘入るま
林とあそびませへ半
それでも秘入る
林過しままといけません
半野まらうの母人さんの中兼知の公悪縁
何の遠慮ぐり方ののうそれとも否らう海方が秘

下レしものそんまをを法仰まを何の勿解せり
 不登のあんのとりふ振るこを後めも思われませう
 秋一そんあう来やト引寄る屏風の画の中も
 彦の山松のちりけつりて高くもるらん浮
 名の癖立まへたる六枚のさもむりまうき
 てうはぐひを多き取中とんえふける

貞烈美談園の花初編 一の巻下

貞烈美談園の花初編 二の巻

東京 狂訓亭主人補綴

第三章

彼三勝ハ半七の身と立親ハ安心させ者事せり
 招不凍ゆくかさまを發明の生信あるゆ名想ち心
 どあ〜こめて替者古ふ通ふ其外ハ他所も仍忠性
 を居る其行状のこれせとらうて替り〜替り
 小母のよろこびりんくさく所爲る株敷のさあ

たのふ他人^{いと}あはれ^{どり}を素^{さの}いと三^{まん}勝^{かつ}どち^ちく^く招^ま
頂^{たか}三^{さん}勝^{かつ}あはれ^れをり^りふと思^{おも}つて居^ゐる人^{ひと}目^め
あま^いは^いば^いか^かて居^ゐる外^{ほか}の^のと^とでも^もる^るの^のい^いは^はど^ど半^{はん}七^{しち}の^の
行^ま義^ぎ目^めあ^あ立^た不^ふと^との^の慎^{しん}と^と不^ふ残^{ぜん}其^{その}方^{かた}の^の心^{こころ}
実^{まこと}不^ふ婚^{こん}の^のそ^そり^りを^をう^うひ^ひ其^{その}代^{しろ}り^りあ^あ其^{その}方^{かた}の^の心^{こころ}の上^{の上}
い^いは^い真^{まこと}心^{こころ}が^が成^{なり}あ^あり^りえ^えて^て世^よを^をま^まる^る程^{ほど}ふ^ふあ^あら^らん^んど^ど
案^{あん}ト^トや^やる^る私^{わたし}を^を母^{はは}と^と思^{おも}つて^て居^ゐる^るヨ^ヨ一^{いち}存^{ぞん}ト^トが^がけ^ける^る其^{その}
仰^{おんが}半^{はん}七^{しち}ま^まの^のお^おと^とる^るさ^さう^うあ^あら^らせ^せら^らま^まし^して^てさ^さを^を

合^あ堂^{どう}の^の内^{うち}若^{わか}者^{もの}等^らと^とあ^あま^まに^に抱^{かか}り^りて^てあ^あの^の心^{こころ}を^を元^{もと}來^{きた}成^{なり}
孝^{こう}行^{こう}の^の心^{こころ}生^{なま}れ^れつ^つま^まに^にあ^あま^まに^に抱^{かか}り^りて^て居^ゐる^る人^{ひと}目^め
か^かく^くま^まふ^ふあ^あら^らま^まに^に私^{わたし}の^のい^いや^やく^く知^しら^らず^ずて^て居^ゐる^るを^を先^{まづ}目^め
半^{はん}七^{しち}が^が大^{だい}師^しま^まま^まに^に参^{まゐ}り^りて^て帰^{かへ}り^りて^て晚^{おそ}用^{よう}が^があ^あら^らず^ず半^{はん}七^{しち}
の^の部^へ屋^やを^を行^いく^くを^を遠^{とほ}く^くと^とま^まる^ると^とい^いは^はれ^れて^て声^{こゑ}を^を今^{いま}
ご^ごろ^ろの^の心^{こころ}を^をま^まる^るか^かと^と隔^へち^ちの^の透^{とほ}り^り取^とり^りて^てな^なれ^れば^ば其^{その}方^{かた}
が^が異^い見^{けん}の^の涙^{なみだ}声^{こゑ}始^{はじ}終^{つひ}と^と不^ふ残^{ぜん}ま^まま^まに^に一^{いち}存^{ぞん}ト^トが^がけ^ける^る
あ^あの^の耐^たえ^えと^と息^{いき}を^を赤^{あか}ら^らめ^めさ^さう^うら^らむ^むく^く一^{いち}存^{ぞん}ト^トの^の心^{こころ}を^を

言ひも親の慈悲とす三腸の程ゆゑ涙のたれ
まろり〜がまろ〜ふ身を上一おまきと親の眼を
めてこれをて勿辨るのぢり〜提びて〜
細〜の〜と〜半さるの厚のあ信平〜涙の由縁
やら世自ふ今日ハ縁増て下り〜て涙おむせる
るの〜恋の癖〜一〜癖つひ〜と〜憎のや
ともおまろ〜あ〜けう〜と〜頼むとの由縁ハ
胸ふ針をさすの文膽を〜あ〜されて〜

ト忍入る三腸の背と〜と〜真心の其れ
涙る〜の〜私が取持て〜も同然とれも半
七が不便由縁其方も乳兄弟それの〜
身今でも半七を養子に〜と〜相違ぬ
縁付ねと遠〜心お〜けて居て万事つ〜
居料の中〜溜〜その金もモウ百兩〜と〜
ト〜用意の金の数小粒と〜雜〜あり
ち〜小たんま〜と〜三腸の〜金と

本地色の更たんまの衣類の不残せよ
かきおく思ひく思やるなヨ
あくと存トもまよふ
でもお通るされて下さるま
とお過あそびを渡お尼と
「對」ますとも縁づく
寄もせんたとま
びとの女の男を一人の丹肌
かきおく思ひく思やるなヨ
あくと存トもまよふ
でもお通るされて下さるま
とお過あそびを渡お尼と
「對」ますとも縁づく
寄もせんたとま
びとの女の男を一人の丹肌

人首でも覚て居ます
女房と思つて居ると身も
仇恩のちまはする由の
身も便りふさ
身も便りふさ

て行ゆきかゝる中ちゆう知し道だう取とりて見みるのとて一いちを大だい衆しゆう
背せ兼けんの酒さけをも給たまへて見みるどとてさう半はん七しちも呼よんで来きや
ト母子おとこの中ちゆう三さん勝かつが水みづもりのさぬ酒さけどのをさうく
らふとけしけりあふ用よう人にん十じゆう年ねんはは程ほど半はん七しちと算さん養やう
子このいいのよし死し方かたより中ちゆう来きりけれは是こゝ派はい其その方かた一いち線せん
符ふんと思おもひ定さだまが娘むすめ三さん勝かつの法はふも知しりされば生なる是こゝ
と遠とほざり日ひを兼けん引ひくあふとと女おんな房ぼうとも内うち供くわしとく
親おや親おやへ約やくける事ことも三さん勝かつの事こともあつてあつて是こゝを養やう

あれ何なにむむく後ご室しつの初はつ屋やへ来きられ母ははの声こゑ「ヨや母はは人ひと
さん内うち機はた嫌きらいようか父ちち耶やさんいませぬ機はた嫌きらいひあはれ
るまのません子こ今日けふは本ほん所じよの伯おやぢ父ふさんか内うち大だい太たい烟えんを
其その所ところ「おれぞヨそれゆゑあつてもおれとまを頼たのむてを養やう
おれと種たねばるちかひヨトまは後ご室しつ亦また向むかひ一いち母はは母ははもい
存ぞん上じやう七しちへせられまを三さん勝かつの伯おやぢ父ふさん一いち夜や泊とまりりの
か腹はらどあつて一いち不ふ下げす一いちつこれい嘘うそ心こゝろ配はい二に行いり
通とほりの伯おやぢ父ふさんは兼けんて呼よもあつて明日あしたの父ちちおれ



まを三一三さう三狄ウそれであらう三さう三の三幼奉ウと
う三七三才三ま三を三そ三と三て三られ三た三恩三が三あ三る三の三ゆ三り三
跡三の三母三人三さん三由三来三未三知三さ三う三え三ぬ三く三姓三が三り三引三え
ご三う三私三の三ゆ三を三さ三り三ま三せん三く三油三を三ま三ま三ふ三海三の
ま三に三一三それ三の三さ三う三と三も三勝三ま三ふ三し三る三コ三ウ三く三姓三お三記三
務三も三と三て三姓三が三り三せ三る三ま三前三の三聲三あ三る三ま三と三の三後三ま三ふ
居三る三ま三う三た三引三や三く三其三振三る三ま三と三お三ッ三や三る三か三う三
モ三ウ三く三私三の三春三の三ま三せん三ト三恨三め三ま三う三ふ三半三七三さ三る

引三ん三の三馬三麻三る三ま三と三か三あ三る三の三ゆ三り三さ三う三た三ん三く
引三が三り三一三引三く三よ三い三ま三ま三と三妻三君三由三あ三命三も三と
存三ト三て三居三ま三う三さ三う三け三ん三ぬ三る三義三理三ハ三大三て三も三隨三分
ト三ウ三ま三う三さ三う三あ三な三を三虚三病三を三つ三ら三て三私三の三ま三あ三り三身三ん
引三サ三それ三で三ら三う三ま三の三ツイ三さ三う三た三ん三を三ま三と三の三ご三振三思三ひ
や三一三た三振三る三ま三さ三う三ま三か三る三ま三さ三く三今三の三ま三あ三る三ま三と
と三思三ひ三て三下三さ三の三ま三あ三る三一三ナ三ラ三く三ま三前三の三ゆ三り三振三り
ま三う三て三居三る三十三日三六三日三泊三て三も三う三ま三う三の三ま三あ三る三ま三ヨ三引三ん

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), likely a historical record or a personal diary entry. The text is written on aged paper and includes several lines of characters, some with small annotations or corrections above and below the main lines. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines, with some characters appearing to be part of a larger, possibly illegible, text or a specific format like a ledger or a list.

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), continuing the narrative or record from the previous page. The text is written on aged paper and includes several lines of characters, some with small annotations or corrections above and below the main lines. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines, with some characters appearing to be part of a larger, possibly illegible, text or a specific format like a ledger or a list.

世の中を是非をけし

第四章

さて翌日おるりければ三勝の支度と調へ半七の
前におか一た拵をうす斐君とありまは
ゆて来るな一何ぶろ私に参るの否をいふまは
一其拵が世事といはせと早くゆがひ大分立派
にお粧が世事との早くゆてを参るがヨロト拵で
いるの見舞ふゆて来るなり一斐君の其拵とある

りふふも何ぶろお別れたるがゆていふまはト
斬首時とて一実におれも今日お参りたくる拵で
が大病人の正さうとあるが世に参る一今ま
やあおいさまも他者さうと一正のうさうとある
やうト案ホドコらう拵をふあをのくと迎ひの催
促三勝の思い切く一正のうさうとあると世に参
トままを一さうサ拵一各コウくは内身の日蓮
さあの内直筆拵はさんのおまごう病人の所へ

紙のさきへ貸てきりあそいでこれいふしごと金
と紙小包んで渡し一見舞ふ何を買てきりや
ト残る方なき信切小守といひてきり立出けり三勝の
爺親小伴れ伯父の方一といひてきりてきり伯父
の幸屋也て可非野得金とゆれりは遠の流り医者
親子四人牙子坊主下女と下男まで七人分は富の
はいあつた紙でも衣食の料六正かぬ表間にきり
紙也実お應の住居有りあふ来かると三勝と伯

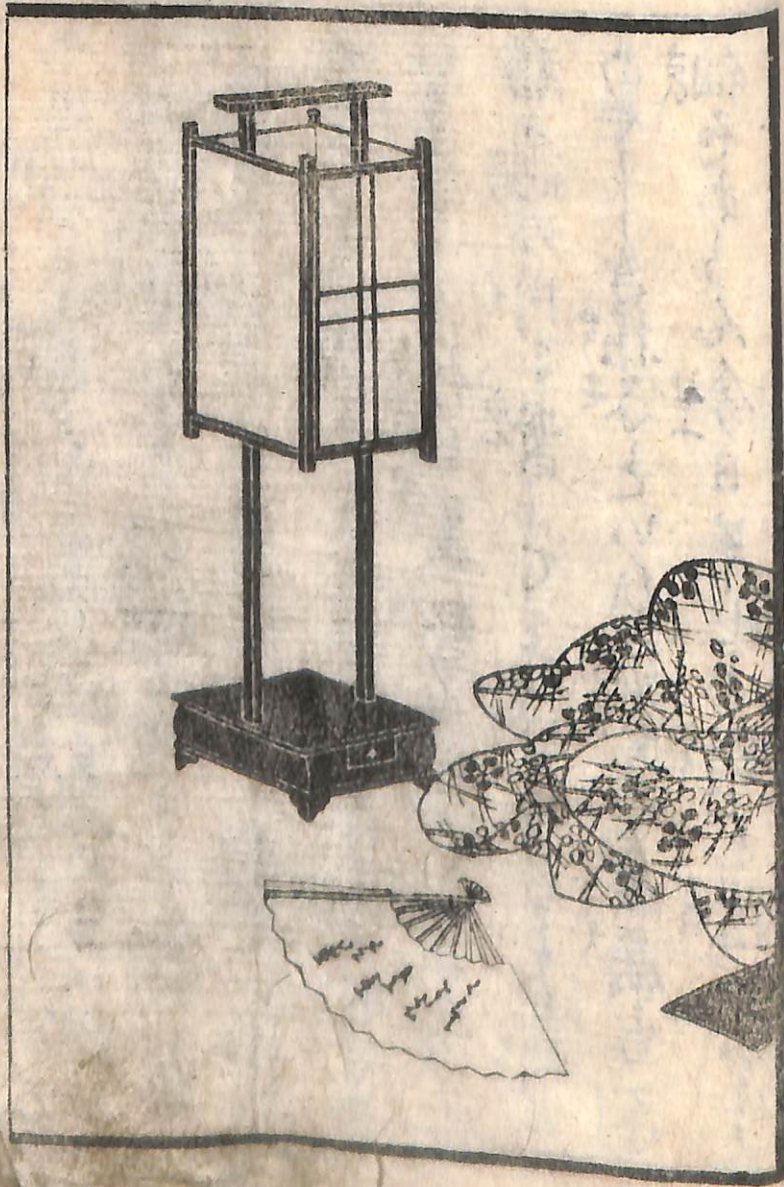
父の家でい出格手かるときりも見つけ一ツやくとんご
早もくと金関へ立出^{伯母}一ツやくとんご
ら一ツそのあ人うとんごふ暑いの下袴を取り三勝
も中の間いり一ひまぐお目おかりませんいのも
出機嫌独去りまぐつは前六伯父さんの座福氣
まをおむつひでいりつあやのませり殊おを来一
中上まを早く伺ひたうとんごのまを来を来のまを
てとんごのまを来一ツやくそのお小梅の實おりあ

とらふてゐるのが餘り久しくあつたからさう
くさげきどまうもまゝ病氣とらむか
まも出まふとそれで病氣と去てやうこのサマ
安堵して休まふ下の中十年の奥(初)下
丸振でまゐるまゐる私ハもさ大さうかつ方のと業
りく肝を渡して多の事と十二其振ふる
ととるまゝとと随分おまがままの
あこ欲やうお爺さんの思ふもこころませんト

まゝで腹た、死思ひれ、マア、何のこもあれ
多業古でも吞まふらんおくんがてア方と五年
不とあはるのノウ大さう容儀がよくなること
ことハ、まゝに妹お娘盛ふまゝノウ自替り
て梅我の自寫真たそれで六男も速ふ
非や其振るまゝを業ハ、
屋敷そで、まゝに、まゝに、世間をさるる
存トません、私ハ随分知て居るを

若旦那も徳山まで参りたまさうぞうとられ
たらと三勝が貞おの夕景の夕映や終あざやふ
見ふりり 伯母 一さんのお赤面をさるあまの夕人の
為のよきとあるまのトりひささう三勝の貞
とらと縁め 伯母 ホニニおれはる程の肌目ごう
思ひ所為のせうは方の貞ごうの指ごう ホニ
徳伯母さんいひあくとおあざり提げたま
久く私ご巾襪様をうかごひませんさうそれ

でわりのあるまのさう是れ おれ 押へ参りたまさう
ナラ 伯母 けりめおるのヨ是れ 毎日私がつれて
徳方 伯母 一行ませう 一いありがさう存トたま
が今日の日ごりのつりのを参りたま 伯母 さう
まの重てごよを頼ひたま 伯母 ナアニ當分
け方 伯母 留ておくはのりごう其糸で居る
一エ 伯母 け静あのおくとお王人さるの力も人
びくるであのりたまさう 世 是れ今日帰りま



扇面と
得く
は、その
意惜と
深ま

るけれども内老年とあどくさゆまのそる恩の
父さ由内夫婦出苦勞多るも柔身のいづ
今更悔んでうらぬと不孝と知つても女の道
まのくねびまぬ薄命着も別道とあるな
け黒髪も今が若狭と六思ふの男子で
髪とびをむのやうたらう宗貞の
此出家をあらると

たうち後いれそりも馬羽玉の

我ら髪をわびせありけん
亦尊に姫君の由歌ふ

心うらふと梅黒髪を

今ひとまかりとまらそり

發明もあふ悲しきもまらる浮世のよりあせう
思ひくくしてあはれるりさまふ伯母も別れを
心の中を汲んで知る茶のるをそら入る痛
ハ程ふくとせ七のこと思ひ出で包涙を

あまのふとろまのこの別をせめて完一度お目
かりおのどおごひをまもぐとらやくそれも久し思
ひの種モウく愚智の思ふまどと思案を定め
心底の男もあつぬ賢女ありさて十年の得玄と
相續綱の三勝と呼寄なれば三勝の伯父も向ひれ
笑とそし七挨拶をまじり伯父の得玄一コレサく
其拙ふ義理を述べにわづぬとご子も同程
お身でまきあつりぬやしくい娘ふるあつらう

とれお早速まじりけ伯父がまきに頼まふあはが
亮と兼知していれまのう一コヤあごまらご伯父
さんの御身おるまひまうとごあつ何なりとも背
まますまのまらるうか王のある身でごまらつら
お憑とまらる筋お依まして六爺さんの御でもそむ
まはらトまらりりられて親伯父もまらごまらけ七
んえけらる得玄いあが笑ひして一あうま程おあ
の由亮とまら外の頼でもまのけ方の次男の

種治所と主婦ふあつて親父さんと福屋とせき
これまのろ。エコいあのねおお事案あれとお身でい
公大てのい世苦勞なるとい思ひぬらそで業中入る
まのが種治所の北太其方の十九似ありうらぬと
いふでもるの。エ美知志てこれまのうとりと三勝返答
あくさううらむけがぶの性急たまのうひて 十返
親とせぬう三勝親と親とあつらへ婚姻ありとの
とい思ひぬらそ不孝のあつたわさつとおとく吃ら

きそとあさんなりとせし養れるまごさされと覚悟の
一心東前屋あそれぬ烈女の二途例ふありあふ服
差とぬくより早く鳩田箇の根よりふつう切
放せそのなれうちの稲妻よりなる死自在の武士
の妻女となりた死生立ちあつたや人とこれいとあど
ろけは三勝の切落せし鳩田をあの伯父さん
あさう差そ上果の上うら七才もを産の親より
るを深の由恩を清と伯父さんの御ふそむくま

三橋亦一^{まさ}史^{あし}父^{ちち}解^{とく}さん^{さん}が不^ふ孝^{こう}のよのお吃^あり^あの^あ不^ふ孝^{こう}
いづ^いら^らとの^のあ^あわ^わく^く一^いも^もは^は心^{こころ}で^でい^いふ^ふま^まま^まが^が十^{じゅう}五^ご世^{せい}
ろ^ろ今^{けふ}日^ひは^ひ日^ひも^も七^{しち}七^{しち}七^{しち}の^の屋^やま^まが^が情^{なさけ}と^とい^いふ^ふ
平^{へい}ん^んの^の傳^{うた}ふ^ふ事^{こと}と^と長^{なが}禮^{れい}後^ごの^の生^{せい}ふ^ふ誠^{まこと}と^とま^まと^とい^いふ^ふ
浦^{うら}ま^まら^らて^て命^{いのち}ま^まを^をあ^あら^らひ^ひふ^ふた^たて^て身^みに^にあ^あや^やま^まり
半^{はん}七^{しち}七^{しち}七^{しち}の^の由^{よし}養^{やしやう}子^こあ^あら^らせ^せれ^れ秘^ひび^びる^るぬ^ぬお^お成^{なり}
逆^{さか}も^もは^は身^みの^の飯^{いひ}の^のま^まと^とぬ^ぬぬ^ぬと^とい^いふ^ふ思^{おも}う^う
も^もか^から^らぬ^ぬ縁^{えん}と^とあ^あら^らせ^せて^ては^は七^{しち}七^{しち}七^{しち}の^の由^{よし}養^{やしやう}子^こ

にとおまを^{まを}あ^あら^らす^すた^た心^{こころ}の^の切^{きり}り^りと^と朝^{あさ}夕^{ゆふ}あ^あら^らす^す神^{かみ}元^{もと}
一^{いち}思^{おも}ひ^ひま^まを^をせ^せて^てら^らぶ^ぶさ^さの^のま^まと^と預^{あづか}り^りて^て存^{ぞん}と^と思^{おも}う^う
る^るま^まを^を物^{もの}と^とい^いふ^ふか^かま^まを^を入^いれ^れな^なく^くお^およ^よし^しと^とも
養^{やしやう}子^こに^には^は性^{せい}ぬ^ぬ實^{じつ}ひ^ひて^ての^のる^る心^{こころ}や^やう^うの^の樂^{らく}と^とも
ると^とあ^あつ^つあ^あや^やら^らて^て始^{はじめ}終^{つひ}の^の心^{こころ}私^{わが}と^とい^いふ^ふ心^{こころ}と^と
嬉^{うれ}し^しの^の仰^{おほ}せ^せを^をい^いふ^ふ心^{こころ}を^をい^いふ^ふ心^{こころ}と^とい^いふ^ふ心^{こころ}と^と
お^おま^まを^をい^いふ^ふ心^{こころ}と^とい^いふ^ふ心^{こころ}と^とい^いふ^ふ心^{こころ}と^と
思^{おも}ひ^ひの^のか^から^らぬ^ぬ縁^{えん}と^とい^いふ^ふ心^{こころ}と^とい^いふ^ふ心^{こころ}と^と

あの身と思はるはまゝと涙みぎく小立ぬ
言執たぐりきけは世の仕長とてりんとそ
思ひまけれ

一首と證とて人情とあり

情と思はる人も契りけれ

かろるるくひは世とそつけれ

貞烈美談園の花初編

二の巻

貞烈美談園の花初編 三の巻

東京 狂訓亭主人補綴

第五章

烈しき所為もさよふ女なり久しなる涙とてあわく

平七きより見見とや上とて後室さあかたうしに

不埒にやとて彼とのかれ二人の中ハ私をゆりては

事子にやとてあまうめて居ても恨てあはら

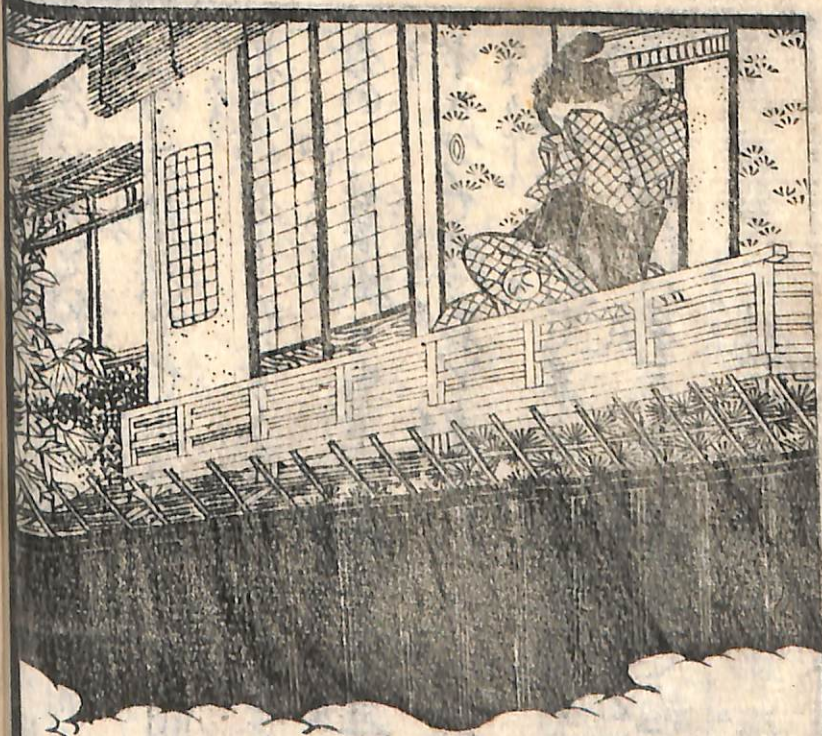
と私をあふさきとてさされて百兩といふ大金と

簞笥ふかたくつと拵しと小袖を残らむ申す程ま
で身のこも付て申すと云作との四五日以せん
それやとよまを申申あきを猶ても不孝と不孝の
罪ハ除れぬけ身のりさぶらと申免さされてくご
さいまゝ髪と落さも糸終らしく思入て居
まされれど貞女と立て不孝のいひ可け恩と情の
二方(おいとゆもい)のうさぬのがお名残惜の後室
さる。おやうらうらいの半七さるモウ此世でかありのも

かあるひまをまきいごふぞ来世か例お居ては世の
申恩を報ト云今朝も半七さるの云作あら
ごうも今日(けふ)の(き)もるるが大恩ある伯父の大
病と申てやね不便お思ふ自あふ義理とわ
せらるるもの候るる収得世ごとあらあわらて申
守とか金とあるづらう申すて伯父へ土産と持
てゆけ病人へ不実とされと今日(けふ)の(き)申て又ゆくと
あまやうてそれう二階(か)より申すことと

かたればぬしとくす後時よはそれ程やどにおかひりめいたる半七
きよかろうじひの起おこる必定じつじやう一若且なほ那も急いぢ地づ
ふるさつしとれ半七おんをぬけしと縁ゆかりぬとと作あしけ
らりしサテ尚なほ惑まどむけまどしと親おやと伯父おぢとの心配しんぱん
とある二勝にかつが素すのびくサまりをてなほにくみせられ
が掃はらをまるところなばせひるく不ふ考こうありしことと宗
くもして置おの差ちとひ移うつるより外そと所ところもあ伯母おば
由よし涙なみだの眼めと拭ぬひしとありしとふも仕方しかたかゝるけしこれ

髪かみの延のびると結むすてマア今宵こんやハ伯父おぢの看病けんびやういことせ
たのとお預ひかひ中ちゆうと亦また昨日きのうハ一いち日にち明日あしたハ三勝さんかつの急いぢ病びやうと
披ひら露ろをしそれとく髪かみの延のびるまでマアけ外そとハ思案しあんも
るの一いち簪かん掛かりもとを用もちひてハ直な糸いと知しれら傷やう單たんの女むすめ
中ちゆうくつと浮う名なと衣えられまうし十じゆうが病びやうもととさうしとふ
今いま好この心こころの所ところで半七はんしちさゆのお糸いとをそれてはけ十じゆう軍ぐん分ぶん
分ぶん濟すまぬ私わたしハ是これころ立た帰かへらうと伯父おぢの病びやう糸いとかゝるといふ
されぬ由よしハ三勝さんかつことハモウ二三にさん日にちと預ひかてまうアハヤとまを



三勝の文
朝平
忠十郎
拾の嬢と

唯今之世... 十一年... 一若... 性... 法... 一... 下...

唯今之世... 十一年... 一若... 法... 一... 下...

叔半七六三勝が伯父の見舞に於てより引つづる
 急病と成て心由をきくねと彼は是れ目と過したる
 やらぬ其内小を聾入の吉辰と今日目を癒せし
 るまは今日ふむとわれも心のためと筆に
 りける巻紙も胸を焼画の繪半切されぬ二人が申
 せよ神のありまを久くとこむぐあるは花形の書
 きてる倭文字封ハ二重ふきあけてくれぬ心押
 指と付て密に姉を頼む他知ぬやうよ三勝(おとけ)

をれて下さす親父の姉弟心置きた頼母
 きき折半七と急報不其兄とする先方いつる家と
 たつぬ所れたる婦三川中へ海つぎ一入の家
 筑山草本を茂り果る盤員(他)も一揃(乳)
 母や腰元大世の重娘の病業と保頼のまきと物をた
 してゐる急の池(可)しらん抱けははる海を舟す
 くちん(能)物よのふもあの上(手)ゴトせ先(不)笑(六)乳
 母(八)給(び)一(才)久(一)方(七)お嬢(さ)る(の)お(笑)の(自)と(見)ま

一と可娘もさそし書云満ゆる娘之乳一乳才乳生乳之乳帰乳り乳せんが
 かあ乳く乳バ乳か乳案乳ト乳推乳び乳し乳ま乳ま乳る乳先乳刺乳乳乳母乳が乳待乳乳乳山乳夜
と違乳り乳て乳親乳光乳と乳り乳入乳小乳黒乳雲乳色乳と乳り乳て乳世乳苦乳ひ乳ま乳り乳ち乳け
た縁乳強乳ハ乳純乳度乳出乳来乳る乳と乳中乳て乳よ乳う乳ま乳り乳こ乳ト乳小乳排乳ち乳
小腰乳元乳が乳一乳目乳と乳く乳お乳乳乳母乳さ乳ん乳書乳云乳息乳さ乳あ乳が乳お乳帰乳り乳ト乳知乳り乳
せ小乳娘乳ハ乳い乳そ乳く乳と乳一乳乳乳母乳や乳書乳云乳湯乳が乳ぬ乳る乳こと乳一乳お乳と乳さ乳
まの乳旁乳ハ乳些乳少乳の乳ふ乳る乳私乳も乳真乳ハ乳約乳ら乳る乳髪乳を乳早乳く乳結乳ぶ乳く乳
今や乳一乳これ乳の乳ま乳り乳を乳ん乳ご乳と乳と乳マ乳リ乳く乳お乳医乳師乳さ乳あ乳ふ乳び乳て乳

上ま乳を乳か乳る乳た乳づ乳と乳推乳び乳ま乳ま乳る乳今乳小乳書乳云乳湯乳が乳ぬ乳る乳
まり乳ま乳た乳お乳結乳ぶ乳る乳ら乳く乳私乳が乳あ乳ら乳と乳と乳乘乳り乳て乳ま乳り乳ま乳
せう乳一乳小乳娘乳さ乳ん乳さ乳る乳ら乳く乳え乳や乳う乳約乳て乳こ乳も乳ト乳甘乳り乳ま乳て乳お乳娘乳の乳
一途乳病乳来乳も乳い乳ら乳う乳何乳所乳ハ乳や乳ら乳返乳事乳と乳あ乳ふ乳松乳陣乳深乳佐乳
用媛乳さ乳ら乳て乳あ乳ら乳か乳ら乳思乳ひ乳ら乳石乳巾乳も乳さ乳り乳私乳ト乳若乳も乳預乳ひ乳が乳
かま乳い乳ま乳あ乳の乳泉乳水乳の乳あ乳ら乳底乳ハ乳そ乳う乳ト乳わ乳く乳ト乳覺乳悟乳し乳顔乳
色さ乳も乳常乳ら乳る乳ら乳な乳バ乳射乳落乳す乳女乳中乳も乳る乳お乳甘乳り乳ま乳り乳た乳り乳ら乳は乳
案案乳ト乳ら乳る乳所乳一乳家乳の乳若乳且乳如乳と乳と乳さ乳ら乳れ乳ら乳る乳思乳ま乳ら乳る乳外乳は乳あ乳ら乳

色がどよもりの子乳一た振でございませぬ内若方
が所産こまいませ振ちごうか安雨あんトナまはヨ子か嬢ぢやうさぬ
又ツイれ新造こんぞうさぬとヤスのを口まれまゝオホとちナ二
尚か嬢ぢやうさんといられる方が能よヨうたそれでもあれをま
いごでれ新造こんぞうさぬおわりのを成なこのをま「妾めかけ倦う
の久あま余たり早はやい乳母うた一たカた勿な粹じ高たか僕わがまののう
貴君あまこそお否いなでいは入いる私わが共とも何なにでもおお賜たまへまた
何なにぞくくまののうう「エえくくそれでも私わがと隔へてて

あやむ禮れい振びハ丈ぢやうそそう由ゆ若わ方かた振び「由ゆ田でん嫁よめさぬ
のおえりりとままららもお明あくくるるののませんせんでござい
ませんせんら私わがハハささりり其その工くととまま「ヨよらら乳母うた
「た振ぢやうでございませとれハ且かねねさぬがあららふ由ゆ産うイ
ままおお願ねがひひ提たげげままよりハ由ゆおお秩ちののううでではは方かた「おおまま
取とりりおおままよよららああららののまま。ナな二に人にんや二に人にんの女むすめ中ちゆう
ハ殿との方かたにハ必かな然ぜんでございませま「これこれののああらら乳母うた
中ちゆうでハ其その振びるるいいままとといいふふ成な程ほど実じつ家けに居ゐるる時とき



くきる病まひの文章ぶんしょう 一いち珠たまの奇き癖くせをあつた
ひるがう中ちゆう窓まどとさきをと明けあけ一いちサアさあお嬢おぢやうさあより
お少おせう摺すりづけせトと操さうをうげたるあまのあや筆ふでにに
は紅べにゆくりとこそか知られる也

運うんの枝えだも今いまとるとはよきき義理ぎりの
隔へき垣がきさあさあ外うづつ月のあんな少せう別べつれれのの
細こよりより思おもいい極きくありありひるひるああああ

あきい身みのまゝま愛あい恨こんののすすり
本ほんささゆゆるるにに由ゆ別べつれれととああああをを知ちるる
少せう別べつれれををああままにに忘わすれれぬぬ極きくととああああ
ああままいいととああいいととああいいととああいい
神かみああいいぬぬ身みののけけううああいいととああいいととああいい
せせりりままいいれれ何なんののああいいととああいいととああいい
そのそのままいいととああいいととああいいととああいい
そのそのままいいととああいいととああいいととああいい

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. It consists of approximately 10 lines of dense, flowing characters. The script is highly stylized and difficult to decipher without specialized knowledge. There are some small annotations or numbers interspersed within the lines of text.

Handwritten text in a cursive script, similar to the top page. This page also contains approximately 10 lines of dense, flowing characters. The ink is dark, and the paper shows signs of age and wear. The script is consistent with the top page, suggesting a continuous document or a similar style of writing. Small annotations are also present throughout the text.

唐は何人の心で作りし
少入の事をぬきの癖は父の癖
夫婦よりの定規と縁の申れは

ト瀆りけさるゝ各のうは乳母の涙とそと
お園も姑終老をあはせまこ今所ふ半を
トと奥園うとあめて横よ息とそむける

七女は時々出例ははとあつひと返

つまげんとそあねひあもあふ和
よふのそ人ぐあぶりのはその時
あふねをうつるをり歩はくは
まおを二月のうら凍あつ
あまといふもうちわまれ阿ま
勿辨なく君あもあひの
は身は果報の束の様の屋と
怒とは情のあれを極めあは

親知おやちくばか重おもなりかうの山やま根ね衣えはらひ
お月おつきふかるる時とき何なに面目めいぶつがあらない
男おとこふそひめをあまらしめていつまあらる
おのままのい緒いとくひもたは法師し
成なりすよの作らわるえて居るがこの
手て巻まきがあまらしめる男と保とと
いつら車と心ばつらならず
おのからおのこらいまへにおのこらいまへに

産うまへる髪切きり

心こころころころままとあらしめ思うを

いまままままとこころをかかし

とよいまをせたらあらまらしめるかはらいを

まま身みふらんどおのこらいまへに

おのこらいまへにおのこらいまへに

おのこらいまへにおのこらいまへに

かりんをありんらんらん
伊弉
伊弉の心よりあつひまわらぬ中
平のあまの君の心世のつらさ
市橋のくさもくさ後宮の心
つねびの身をわけてえん
終るよまらうとてあまの心
そんおげんごまをいま婦の中
ひらまらう百萬年も心あたま

少年よりまはるの心
かりんをありんらんらん
まらうとてあまの心

ト瀆からまらうか園の心
持てまらうか園の心
の心の中思ひやまらうか園の心
まらうか園の心

つらうらんふ不^つ次^まの巻^{まき}（書^{かき}）つぐぬの^か
 の身^みのちの^ちあふ^あふ^ふとよ^よゆ^ゆる^る人情^{にんじやう}を^を知^しり^り
 知^しる^るや^やま^まと^とあ^あの^の取^{とり}り^り



真^ま烈^{れつ}美^ひ談^{だん}園^{その}の^を花^{なご}初^ま編^{へん}
 其の巻了

以^も如^も

淵^ふ淵^み



913.5

ソ

2